

有訴率

高齢者（65歳以上）ともなると、個人差はあるが体（持病など）の不具合、知能の衰え（記憶力低下や認知症）、活動不全（腰痛など）といった自覚症状が現れる。

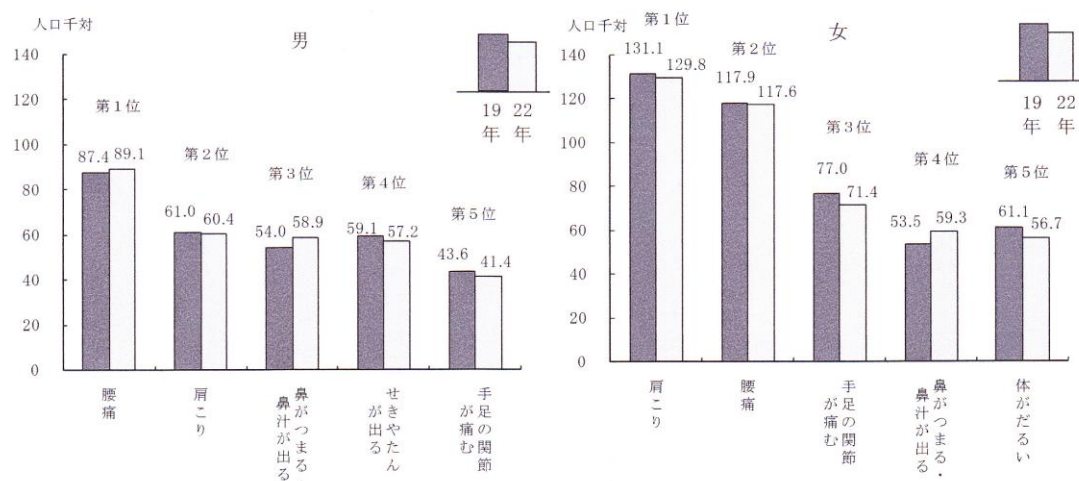
性・年齢階級別にみた有訴者数（人口千対）

年齢階級	平成22年			平成19年		
	総数	男	女	総数	男	女
総数	322.2	286.8	355.1	327.6	289.6	363.3
9歳以下	248.1	252.8	243.2	239.8	247.8	231.3
10～19	203.4	207.3	199.3	203.3	200.4	206.4
20～29	221.9	178.5	264.7	224.9	178.6	270.5
30～39	272.4	225.7	317.1	273.9	229.1	317.3
40～49	292.1	246.0	336.5	295.5	247.8	341.4
50～59	321.3	275.9	364.8	338.1	289.2	385.0
60～69	381.6	350.9	410.1	416.2	381.2	449.1
70～79	484.3	454.9	509.1	508.9	479.6	533.3
80歳以上 (再掲)	525.1	518.4	528.9	543.3	531.1	550.2
65歳以上	471.1	443.7	492.5	496.0	464.8	520.6
75歳以上	517.5	500.0	529.0	538.3	516.8	552.5

注：有訴者には入院者は含まないが、分母となる世帯人員には入院者を含む。「総数」には年齢不詳を含む。「国民生活基礎調査の概要」（厚生労働省・平成22年）から。

60歳をすぎると38%、70歳をすぎると48%、80歳をすぎると52%。65歳以上では47%、75歳以上では51%。いずれも女性のほうが高くなっている。

性別にみた有訴者率の上位5症状（複数回答）



注：有訴者には入院者は含まないが、分母となる世帯人員には入院者を含む。

「国民生活基礎調査の概要」（厚生労働省・平成22年）から。

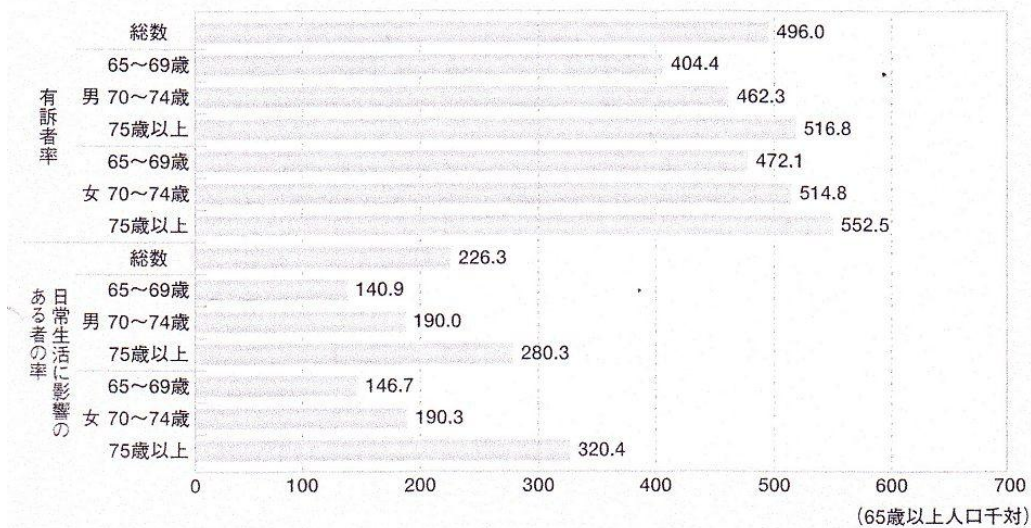
男女いずれの場合も、腰痛、肩こり、手足の関節が痛むなどが目立つ症状である。

高齢者の健康状態

高齢者（65歳以上）のうち、病気やけがなどで自覚症状のある人（有訴者）は、49.6%でほぼ半数になっている。ということは、半数の人は何の兆候もなく健康に過ごしていることになる。また日常生活の動作、外出、仕事・家事、運動などに影響がある人となると、22.6%（平成19年）で、5人にひとりの割合になる。日常生活の動作というのは、起床、身づくろい、食事、入浴などで9.9%。外出は準備が制限されるので9.8%。仕事・家事が8.4%。運動6.4%。（数値は平成19年の「国民生活基礎調査」から）

参考：「少子高齢社会の基礎知識」（エイジング総合研究センター）

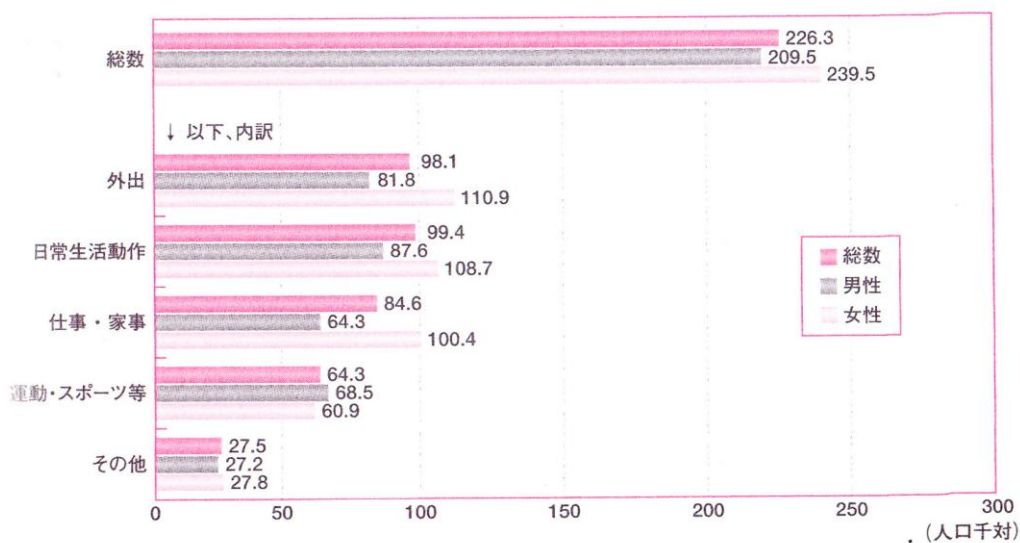
高齢者の有訴者率および日常生活に影響のある者の率（2007年）



注：有訴者には入院者は含まないが、分母となる世帯人員には入院者を含む。

「国民生活基礎調査」（厚生労働省・平成19年）から。

高齢者の日常生活に影響のある内容別割合（率）（複数回答・2007年）



注：有訴者には入院者は含まないが、分母となる世帯人員には入院者を含む。

「国民生活基礎調査」（厚生労働省・平成19年）から。